快に思ひ、道三殿と不和になり、終に道三を弑して其家を奪ふ。然して實父の仇を討しと同様なりと言はれしとか。されど養父を弑したる天罰は遁れずや、病身となり夭死せり。其跡こそ義龍の子今の龍興殿、此人暗愚にして佞臣を愛し、忠臣を遠ざけ、滅亡目のあたり。斯様に齋藤家は血で血を洗ひ、其家を奪ひ合うて終始いたす。其齋藤家に義理立ては、もう是迄、先生が御盡しあれば充分でござりませう。此上は義を御取りになつて、小さく申せば織田家の爲、大きく申せば天下の爲、亂世を鎭めるは、永く竹中先生の軍略に從ふ可きものと、禮を厚く御迎へ申上げます。御高見は如何』

『イヤ木下殿、拙者を説伏せんと苦心する事感服の外はない。織田家の忠臣、然し人各々其志と違ふ。我等も一度決心した事は容易に飜へすべきではない。是も齋藤家へ忠であらうか。モー此話は思ひ止まられよ。イヤ面白い話を聞いた。サアお休みあれ、大分夜も更けた』

半兵衛は座を立つて次の間に入つたかと思ふと、程なく鼾聲。秀吉も童子がとつてくれた床の中へ入り、とろ〳〵して居る内に早くも夜明となつた。起上つて身仕度をした藤吉郎、

『童子、種々と御厄介になつた。先生お目覺になつたら宜しくお禮を申上げてくれ。これで失禮する。童子にも又會ふ。氣嫌よう』

『先生に御傳へ申します。小父さまも、また遊びにお出なさい』

『オ、、有難う』

ふり返り〳〵、手を振りながら山を下つて洲股城へ歸ると、鶴首して待つて居た大澤兄弟、

『ヤア御苦勞で御座つた。如何でした』

『竹中先生に御會見できましたか』

『いや大澤氏、竹中殿は大した傑物だ。聞きしに勝ると云ふか、まア出來るだけ熱辯を振つて見た。どうやら荒ごなしはしたと思ふが、まだ〳〵之からだ。

『それで御話はどこまですゝみましたか』

『先づ六七分迄か、さア五分ぐらゐかも知れんな。拙者の仕事はあれまでだ。是から先は貴殿の腕次第、二三日したら訪ねて見られよ。斯う話を持掛けるのだ』と二三注意をした。

それから三日目、大澤治郎左衛門は、之と武者修業者に仕度をとゝのへ、我身の浮沈にかゝはる大事と、人目を避けて栗原山へ登つて來ました。今迄度々來てゐるので道案内は心得てゐる。童子も顏馴染で笑ひながら出迎へた。半兵衛も義弟が來たことゝて喜んで迎へ、

『ヤア御無事か、宜く見えた。其後鵜沼を退去したと聽いて意外に存じて居つた。どうした事ぢや』

『イヤハヤ先生、御話するも赤面の至りで、あやふく一命を失ふところでありました』

『どうした譯であるか』

『御守じの通り、弟の主水は織田家へ間者に入込んで居りました當時、厚く恩を掛けられて弟は心から織田家へ歸服してしまひました。それが拙者へ禍してか、近頃龍興侯へ讒言する者があると見え、拙者の命を絶つて不忠者の見せしめにせんといふ噂を聞き、讒言に身を果さんは餘りの口惜さに、先生へは申しにくい事でありますが、主水を便つて信長の許へ行きました。ところが僞りの降參だらう。油斷を見て信長の寢首を搔く所存だらうと立腹甚だしく、大勢に取卷かれて領分境ひの洲股城迄追拂はれました』

『それは氣の毒千萬ぢや。それから』

『齋藤家には疎ぜられ、織田家には間者であると疑はれ、走るに國もなく、歸るに家もなく、途方に暮れました處、御聞及びでござらうが、あの洲股の城主木下藤吉郎殿、深く同情してくれまして、貴殿の降參間違なしと云ふ身の證明さへ立てば、主君信長に取なして重く御用ひになるやうに致すと申される。就ては誠に申兼ねたる事でありますが、先生一度洲股へ御足勞下され、木下氏に御會ひになつて、大澤は弟なり、門人なり、決して僞りなど申す者ではなく、信長公に心服して居ると、御言葉添へ下され、尙暫くの間、洲股に御滯在が願ひたい。さうすれば信長も

安心して拙者を信用するでござらう。其儀をお願ひに參りました』

兩眼をとぢて聞いて居た半兵衛は、高聲に笑ひ出した。

『アハヽヽヽ、大澤、いつから猿の手先となつた』

『エ、猿の手先、夫は何んの事です』

『もう貴殿が來る時分だと、昨日から待つてをつた。先日木下藤吉郎が來て、拙者を迎へたいと餘程熱心であつた。よい程にあしらつて追ひ返したが、次には御身等兄弟をよこす事と思つて、實は心待にまつてゐたが、到底織田家へ降る事は出來ぬ。平にお斷りする。惡く思はぬやうに』

『ウム、先生、さう云ふ譯なら何もかも打ち明けてお話し申す。洲股迄お出でを願ひたいと申すのは、信長へ奉公の、木下に味方して下さいのと、申す事ではありませぬ』

『それでは』

『私としても、信長に降るのは、多年受けたる齋藤家の恩義を思へばこそ……』

『ハヽア、何で齋藤家の恩義のため信長に降るのか、承はらう』

『されば、齋藤家は柱石とも云ふ可き先生さへも退身なされた。此有樣では今にも織田勢攻入る時は、以前とは事違ひ、あの堅城の稻葉山の落城せんは目前のこと、此儘成行に任せて置けば、齋藤の家は斷絶いたすばかりでござる。されば拙者は信長の手許にあつて、充分の働きをなし、

其功に代へて龍興侯の助命を願ひ、小なりと雖も、齋藤の家を建て〻置く所存でござる。斯うなつては齋藤の家を繁ぐ事を考へるのが何よりの忠義、それゆゑ先生の御助力を御願ひ致すのであります。然るに我心中を御存じなきや、只今のお言葉、これにては頼みの綱も切れ果てました。

所詮齋藤家は亡る時が到つたものであるが、あゝ是非もない成行でござる』

眼を閉ぢて歎息する治郎左衛門の顏をぢつと見て、重治は膝をのり出し、

『アヽ、恐れ入つた。某は今迄嘗て他人の心中を見誤つた事がない。然るに今度ばかりは、貴殿の心中に斯様な深い考へのある事とは氣が付かなかつた。實に見上げた心中だ。成程云はれる如く、事こゝに至つては、萬一の場合、イヤ、萬一の場合とでも云はしてもらふ。餘りに淋しき齋藤家の前途、道三殿の盛時を考へて……ウム宜し、洲股へ參らう、齋藤家の家名を殘す爲なれば、木下に會つて貴殿の證明としよう、信長の疑念の晴れる迄、滯在と致さう』

『あゝ有難く存じます。先生、それにて安心仕ります。いつ頃お出で下されますか』

『早速同行いたさう』

『それは一そう忝けない』

大澤治郎左衛門は心中に思つた。竹中先生ほどの智慧者も、木下の智慧にはもう引掛つた。恐ろしい智者は藤吉郎だ。木下が言へと教へてくれた通りを述べたら、先生も山を降りる決心をした。洲股へも、清洲へも行くと云ふ。齋藤家を思ふあの誠忠を利用した木下は、半兵衛先生より上かなアヽ、斯う考へながら夜食の馳走をうけた。

『大澤、明朝は下山するから、早く横になつたらどうぢや』

『ハアヽ、では御先へ御免を……』

『未だ何か考へて居るな、ウフヽヽヽ、夫では貴殿の考へて居ることを當てゝ見ようかな』

『何も、もう考へては居りませぬ』

『イヤ〳〵、考へて居る、それは斯うだらう、たうとう竹中も猿面冠者の智辯に引掛つた、藤吉郎の方が上だらうと』

『エヽ、先生そんな事を、私が』

『マアヽ終り迄聞かれよ、木下が入智慧の貴殿の言葉、私はそれをも承知で引掛つて行く、御身が信長に白眼まれたのも、木下の策略で今日を造る爲ぢや、それも承知で行く。主家の爲なら何とも思はぬ。貴殿のためにもならうかと、まア宜い、話はこれ迄ぢや、明朝は早い』

『アヽ、恐れ入りました。木下氏より先生の方が矢張り上でありました』

『上か、アハヽヽヽ』

さて翌日は栗原山を出て、洲股城へ來ると秀吉は、先生ようこそ御光來とばかりに、下へも置

かぬ待遇をして、崇め奉つておいて、清洲へ出仕して信長公に報告をすると、

『さうか、藤吉郎、たうとう半兵衛を引出したか、能く來たのう。汝の力はいつもながら感心する』

『さて半兵衛は誘ひ參りましたが、美濃攻めはまだ少く御待ちを願ひます』

『待ち遠しいな、どういふ譯だ』

『半兵衛が下山するには、條件がありました。私一存を以つて取計らひましたが』

『ウム、あれ程の男ぢや、條件なしでは下山はしまい。それは』

『ハイ、洲股へは參るが織田家から御祿は頂かぬ、木下の食客になら成らうと申すのです』

『宜い、同じことではないか』

『ハア、次に稻葉山城手入の節は、齋藤龍興の命はお助けを願ひたいとの事』

『それも仔細はない。美濃さへ得れば、暗愚の龍興助けおいても能い。何の心配はない。それから』

『次が一寸……食客たる以上、知れる限りの軍學兵法は敎へやう、又他國との合戰には、作戰智略の御相談に及ぼうが、美濃攻めの時に限つて、相談には斷じて乘らぬ、この三ケ條でございます』

『少し拙いな、美濃攻めに力を貸さねば差當つて困るのう』

『そこで考へました。西美濃の三人衆を、城から遠ざける事です。安藤伊賀守、氏家常陸介、稻葉伊賀守、此三人が居ては中々落城いたしません。竹中が洲股城に居りますれば、彼等を齋藤から背かせ、御味方にすることは、いと易うございます』

『どうすれば來るのかな』

『先づ、竹中の贋手紙で、三人を洲股まで誘き出し、半兵衛先生は清洲へ出仕してをると僞り、當城へ連れて參ります。其時殿は御會ひになつて、よく參つた、降參の赴き聞き屆けたと、頭から降參に來たやうに取扱ふのです。三人が面喰つて居る內に、盃をやるのです。引出物を多く取らせるのです。斯う優遇なされゝば素より賢明な人達ゆゑ、殿と龍興とを考へ競べませう。斯うなる上は致し方がない、暗愚の弱將をはなれて我君へ御奉公いたさう心になり、思ひを飜すことは鏡に掛けて見るやうであります。三人衆さへ參れば、半兵衛が口を入れずとも稻葉山は手に入りしと同樣でございます』

『さうか、確乎やつてくれ、それなら宜いだらう。稻葉山では同樣に苦心するのう。藤吉は一段と苦勞であらう。其妙計ならば大丈夫ぢや』

『餘り妙計でも……然し斯うでもしませぬと永引きますのみで』

『ウム、もう手に入つたも同然、目出度い事だ』

『御氣の早いことで、未だ大慶は述べられませぬ。ハ、、、、』

それから木下は洲股へ歸り、半兵衛の贈手紙を造り、三人衆へ送ると、贈物とは夢にも知らず竹中を信じきつて居りますから、何か深い思惑もあらうと、洲股へ出て來たので、秀吉は能辯智辯、舌の先でまるめてしまひ清洲へ同道して、信長の面前にてうんと優遇して、豫定の通り有無をいはせず降參させてしまひました。

夢の中に居るやうな氣持の三將が、拜領物をして、信長の前を下り別席へ來ると、秀吉が這入つて來て、

『イヤ各々方御疲れでせう。御當家へ隨身して下さるとは夢にも心得なかつた。實に有難い、織田家に取つて此上もない大慶、各々の御出は實に百萬の味方を得たと同じでござる』

藤吉郎の云ふ事は、餘りに大きいので、又しても三將は夢の中で煙に卷かれたやうな心もちで阿然として言葉もなく顏を見合せてをりました。

秀吉は笑ひながら、

『では洲股へ歸りませう。竹中先生の許へ御案内致さう』

『先生は清洲に御出での由を御書面で』

『イヤイヤ、清洲では御座らん、洲股である』

『ヘ、ア』

さては、猿めに一杯喰はせられたか、引掛つたなと氣が付いた時はもうおそい。

洲股城へ戻つて半兵衛重治に面會し、

『イヤもう、酷い目に逢ひました。先生の御書狀と信じまして、猿面の爲に計られて、無我無中で降參をさせられてしまひました。あの猿は酷い奴で、彼奴にベラ〳〵言はれて居ると、何んだか呆つとして、酒に醉つてゐるやうで、何となくふら〳〵します』

『左樣であつたか、藤吉郎に計られたか、私は各々へ書狀を出した覺えはない。まア、欺かれた方が拔りなのだから致方もない。是も皆齋藤家の滅する時だ。天運に任せるより他はない。各々も盡せるだけは、盡して來たのだから、せめて此上は龍興殿の一命を繫ぐやう、城内の者を出來るだけ助けるやう、力を盡して働いてくれ。齋藤家に對するせめてもの報恩である』

そこで三將も、斯う成つては、心から織田家へ歸服の誓ひをたて、何氣なく、平然たる體で一且美濃へ戻つて、次の戰場で降伏すを約束をいたしました。

こゝで織田家は、愈々美濃攻めの軍を起しました。先陣は吉例に依り、柴田勝家、二陣は池田信輝、續いて丹羽長秀、森義成、前田利家、林佐渡守、梁田出羽守、佐久間右衛門、福富平左衛

門、木下藤吉郎等々三萬餘人、潮のよせる如くに美濃路に攻め入りました。

さても齋藤方は、軍師を遠ざけ、三人衆は戰場へ出るが早いか、旗を卷いて織田方へ降參したので、手足をもがれたやうなもの。美濃第一の勇將と聞えの高い、日根野備中守、弟彌次右衛門は、たとへ三將去ればとて、味方の勇氣を落すまいと、實に必死の血戰、又血戰、猛威を揮つて戰ひを續けた。城は名におふ、日本二十四城の一たる、稻葉山の堅城なり。日根野兄弟に引立てられた城軍は、犇々と攻め來る織田の大軍を引受け、じつに能く戰つた。

晝夜を分たず三日の間、攻めたて〳〵、押寄せ〳〵、攻め拔いたが、城は恟ともしません。

猛氣、短氣の信長は、

『押せエ、押せ、續け〳〵、力攻にせよ。味方の損害、殘念ながら已むを得ぬ。押せー』

身を振はして烈しき下知に、揉みに揉んでの難戰、又難戰。

此時馬を近付けた藤吉郎。

『暫く〳〵、無理押は御止め申します、力攻めを續けましては、味方の損害のみ多くして、其數測り知ることが出來ませぬ。秀吉些か思ひ付いたる事これあり、暫時御猶豫を願ひます』

『ウム計策あるか』

『ハイ』

焦燥る心を押し靜めた信長は、城攻の中止を命じた。

其夜本陣へ、潛かに木下が來て、

『この稻葉山は、力攻では損失のみで中々落城いたしませぬ』

『して其方の策略は』

『總じて如何なる名城にも、魔除けと稱して、人知れず一箇所は必ず手を拔いたところのあるもの、これ築城の法と申します。此城にもそれがあるに相違ございませぬ。その秘密を知る者は竹中かと存じます』

『ウム、さうであらう』

『併しながら半兵衛は先頃御披露いたしました如く、美濃攻には、一言も助言せぬと約束がございます。訪ねた處で申すわけはございません。其所を考案して居りまする』

『ウム、ウム、能い考へはないか』

藤吉郎の隣りに控へて居りました、軍目付の梁田出羽守清近が、

『斯うなされては如何、竹中を明日御召になり、殿が、木下に稻葉山の攻口を、半兵衛に訊ねよと仰せらるゝ、すると半兵衛が御斷りを申します、其時殿は御怒りになつて、木下に切腹せよとおつしやるのです』

『ウム、ウム、それから』

『すると、見兼ねて半兵衛が止めるだらうと思ひます。若し止めなかつたら、私が止め役になります。然し必ず止めませう。さうしたらば、半兵衛も仕方なく語るでこざらう。此計策はいかがですか』

『ウーム〳〵』

藤吉郎は苦笑をして、信長の顔を見た。

『梁田の考へも面白いやうなれど、半兵衛は中々其手には乗りますまい。我々より、一段上の考へを以つて居りますから。然し彼も熱情の人でありますから、大澤と共に熱意を以つて頼んで見ます』

『成程、ア、云ふ賢者には、誠意をもつて當るより外手段はありませぬか』

『さうぢやのう、藤吉頼むぞ』

そこで木下は、大澤治郎左衛門を連れて、竹中を訪ね熱心に頼み入ると、流石の半兵衛も熱意に動かされて、龍興助命の書付けを信長から受けて、城の攻口間道を細々と教へました。そこで藤吉郎は再び本陣へ出て、

『竹中の教へによりますと、此城を落すには、裏山へ廻り、道なき道を踏み分けまして、搦手口へ出で、二の丸の水門口へ出るより他に、方法はないとのこと、成程難攻不落の名城にございます、搦手は山深く、人跡絶えて中々の難所の由、大勢は行かれません。私決死の者六七人を連れ、水門口を尋ね城中に忍び入り、火を放ちます故、城内に火の手の揚がるを合圖に、大手より無二無三に御取詰なさるゝやう』

『宜し、然し藤吉、六七人で城内に入る、氣を付けろ、注意せよ、汝の身體ではない、信長の身體だと思へ、それでは行くか』

『ハツ、有難い御言葉、では御免……』

裏山へ進んだ藤吉郎の從者は、蜂須賀小六、弟の又十郎、稲田大炊、加次田綾人、青山新助、日比六太夫、何れも元は野武士の頭分、合せて七人、この人數で搦手を破り、火を掛けて城の中へ飛込んで行かうといふ、實に大膽とも、不敵の企てであります。皆草鞋を二足づゝ用意、兵糧を腰につけ、又山氣を拂ふため、一瓢を下げ、太刀は斜めに背負ひ、腰刀は後へ廻し、スタ〳〵〳〵と、裏山瑞龍山へ分け入りました。時しも永祿七年七月十三日、只今の時間なら、午後四時頃、昔の七ツ時、申の刻、猿面冠者の秀吉が、出發の時を申の刻と撰んだ譯ではありますまいが、其時分に、だく〳〵、汗を流して上つて行く。樵夫、山獵師の僅に通ふ嶮しい細道、瑞龍山の山續き、其細道さへなくなると、竹中のくれたる繪圖を便りにして、雜木雜草を押し分け〳〵岩石

峨々たるところへ來れば、豫ねて用意の鈎の付いたる綱を投げ掛け、それに縋つて登る。危ふいことの限りを盡して山の奥深く分け入つたが、藤吉郎は一番先にすゝむ。

『オイ〳〵、久助嶮しい道路だなア』

『ウン、樂じやアねえよ、モー一ト息だらう、だが六太夫、木下さんは達者だなア』

『それやア達者だ、木登りは名人だ、其早業は猿の如く、とな』

『聞えると悪いぞ、猿の如くだなんて、お前達は未だ友達だと思つてるな、木下さんだなんて、ハ、、、』

『皆んな、疲れたらう、モウ一ト登りだ』

『ヘエ、何これ式に、木下様は御達者ですなア』

『足がかゝ、木登りがだらう、己の本職だといふのだらう、ハ、、、』

『こりや驚いた、足も早いが、耳も早いや、ウフ、、、』

遂に登り着いた處は、金華山稲葉山城搦手の眞上であつた。

『ヤアー、御苦勞々々々、此處まで來ればもういゝ、さアこれから腹拵へだ』

『御疲れで御座いませう。清水を汲んで參りました』

『オイ〳〵、小六、よせよそんな言葉は、皆んな友達ではないか』

『でも禮儀でござる。貴方は御出世して洲俣城の御城主で』

『アハ、、、、城主は能い。でも小さい城の主、己の身體には似合ふだらう。いつ迄も友達でゆかう』

人使の上手な、木下の言葉に、皆ニコ〳〵、喜んで握飯の辨當をむしや〳〵喰ひ始めた。瓢の酒に咽喉を鳴らして、勞れも拔けて元氣は一倍となり、またすゝんで行く正面から飛んで來た古猪、左右に道を開くと、續いて跡から追つて來た若者がある。十三夜の皎々たる月の明で見れば、猪の背中へ飛び乘つたと思ふと後向きに跨つて、尾を確乎り捉へた、其早業は目にもとまらぬ。右手に拔いた短刀で、尾と肛門との間をグサと突いた。猪の急所で、七顚八倒たちまち古猪の息は絶えた。

『强いなア、驚いた。皆んなどうだい』

『己達には眞似も出きない、見事な働きだなア』

『あゝ、倒れた。いけねえ助けてやれつ』

氣が緩んでか悶絶したのを、介抱してやると、やがて息を吹き返した。

『有難う、助けて下すつて』

『强いなア、お前は幾つだ。何んと云ふ名だ』

『十六です、茂助と云ふのです。有難う、皆さん有難う』

この茂助の身分を聞けば、尾州岩倉山の元城主、織田伊勢守の忠臣、堀尾忠左衛門の遺児、堀尾茂助吉晴といひ、此近村の山獵師が以前亡父の家來であつた、其家に世話になつて居るのだといふ。信長を君父の仇と怨んでをる。其物語を藤吉郎は意見をして、敵となり味方となる、昨日の敵は今日の味方、これ亂世の常なりと、例の情熱雄辯で、茂助をすつかり感銘させ、こゝに主從の約束が出來たのです。此少年が後の、堀尾帶刀先生吉晴、十餘萬石の大名となる人であります。……そこで、茂助は案内者となり、先に立ち、

『木下様、七人でお城の搦手口を破らうとは強い人達ですねえ』

『ウム、だが茂助お前にはかなはんよ、皆んな驚いて居る。なア六太夫』

『さうですとも、木下様能い者を見付けましたねえ、頭も感心していらア』

『オヤ、頭だと、さうか、木下様此人達は野武士ですね』

『アハヽヽヽ、さう見えるかな。六太夫、茂助は力も強いが眼力も強いなア』

『さうですねえ、己達の御里があらはれちやつたア』

八人となつた一行は、又も山深く來ますと、前面に流れの音がザアー、ザアー、と聞えた。見ると三間ばかりもある谷川で、橋がない。青山新助は水勢を見て、

『橋が無いのは困つたなア、三間ばかり平地なら何んでもねえ、すぐ飛越すが下を見ちやア、一寸飛べねえ。稲田さんどうだい』

『さうだ、だが此所を下つて又上るのは容易でない。手間取つて居ると夜が明ける。それでは仕事が出來ない。木下様どうしませう』

『さうだのう、飛ぶのは無理だぞ、橋を架けるのだな』

話を聞いて居た茂助は、谷川の脇にある、手頃な杉の木を、兩手でエイ〳〵押して、メリ〳〵、根が綏んだところを押し倒した。つゞいて一本、又一本、同じやうに倒したのを腰に付けたる細引で、三本並べた杉をキリ〳〵卷いた。

『さア、皆さん手を借して、橋が出來た。細いけれど三本結べば大丈夫だ。これを架けよう。皆んな早く、ヤアー、エ、イ』

不思議な怪力、人間業とは思へぬばかり、七人は呆れて、アツと開いた口が塞がらないのでした。やがて力を合せ、谷川邊へこれを立て、向ふへ見當をつけ、川の上に倒して橋とした。茂助は急造の丸木橋を、猿のやうにする〳〵と渡つた。

『木下様、皆さん、早く〳〵』

蜂須賀小六は目を丸くした。

『珍らしい力だ、力と智慧、大した堀り出し物ですなア木下殿』

『ウム、さうだのう、能い土産ができた』

一同渡つて行くほどに、チヨロ〳〵燃えてゐる篝火が見えた。

『アレ〳〵、向ふの篝火は、お城の哨所小屋ですよ。番人が居るんです。あれが搦手の入口になり ます』

川口久助が物見に行つた。……程なく戻つて來た。

『藤吉郎様、見て來ました。十人だ。要害を頼みにしてか、油斷をして皆んな寢て居ました』

『ウム、さ行かう、番人は皆引ツ括つて、逃がさぬやうに繋いでおけ、斬るなよ』

どうと這入つた番小屋に、忽ち十人を珠數つなぎ、猿轡を咬ませた。其先の小道をすゝむと水門口に突當つた。

『あつたぞ、こゝだ〳〵、皆で破れ』

めつたに開けた事のないところか、閂は錆つき、水泥は一面に封じてあり、手の付けやうがない。

『皆んなの力で破つてくれ、茂助今の力を出せ』

『ハイ、何んのこんな水門、エーイッ』

八人掛りで稍暫し動かすうちに、さしも堅固な水門を、メリ〳〵〳〵、ズシーン、見事に破つて内に入ると、もう城中でした。要害を頼みにして、番兵は一人も居りません。秀吉は指圖して彼處此所と建物へ燒草を配り、强藥を撒散らした。いつでも火の放てるやうな仕度である。

『宜しつ、合圖の瓢を上げろ、高く〳〵』

日比六太夫は、長竿の先へ瓢を結びつけて、空高く差し上げた。ヒラリ〳〵、段々早くなり、ビユー、ビユーと振り廻した。

折柄、夏の夜の明け易く、鷄鳴曉を告げてほの〴〵と白み渡る。此時大手の城外に待ち構へて居りました、木下小一郎秀長、秀吉の弟です。此人、木下の仕込で軍事に通じ、中々の智勇、秀吉が最も愛して引立てたといふ。此戰から名を揚げた。後年、大和大納言秀長と立身する戰上手の青年であります。

小一郎は勇み立ち、

『ソレ合圖の瓢が上つた。鬨の聲、鬨の聲を揚げろ』

同時に、わーッと八百人、喊聲を揚げた。

此時秀吉の從者は、八方へ火を放つた。燒草强藥といふ、秣に煙硝は物すごき音を立てゝ、折しも吹き來る嶽颪に炎々と燃え上つた。

織田方の總軍は、小一郎軍の鬨の聲を聞き、さては搦手、破れたるか、押せ押せ、蒐れ、進めつと、呼ばはり〳〵總勢は、ドーツと一度に押し出した。

驚いたのは城内の將士、今朝總攻のあらうとは夢にも思はず、中にも城將龍興は、信長何者ぞと、織田の軍勢を一ト呑みにした氣持となり、盃を重ねて大醉をして居た。處へ搦手から火が揚つた。大手の總攻め、搦手の火、これでは堪らぬ。右往左往に亂れたち、上を下への騒ぎとなつた。

靜まれえ、騒ぐな火を消せえ、と下知をするのは牧村牛之助、敵を恐れるなア、織田勢の手並は知れて居るぞう、戰へ防げ、と聲を涸らして駈廻るのは長井隼人、これしきの敵何程の事やあらん、我に續け、我君を守れ、敵を破れ日根野備中これにあり、と手を盡して防戰したが、如何に日根野兄弟が强くとも、牧村長井が血戰も、潮の如く雪崩入る織田の大軍を、どう防ぎようもなく、見る〳〵内に崩れ立ち、血を吐くやうな下知をしても、止めやうもなく敗走した。

日根野備中守は、敗する味方を、本丸へ〳〵と立て籠らせた。はや二の丸は織田方の手に入つた。

日根野の弟、彌治右衛門は涙をはらひ、

『ア、殘念なり、敵の計略に掛つて水門を破られたのは千秋の恨事であつた。要害を賴んで搦手の防備を忘れる譯では無かつたが、今は何をか云はん。此上は各々、本丸を固めて必死の防戰をなさん。美濃武士の最後を潔くいたさう』

斯うして皆本丸へ籠つたが、防戰も其甲斐なく、兵糧庫を燒かれてゐるので、手足纏の妻子は澤山居るし、第一食物に困つた。今は全く、死を待つより外はないのでした。

秀吉は信長の本陣へ參り、

『殿、御勝利、大慶に存じまする』

『藤吉郎、數度の戰ひに利なく、敗戰に、敗戰を重ねたが、攻めあぐみし此城を落すことは、實に其方の働きである』

『ハツ御言葉にては恐れ入ります。殿の御武德にござります』

『それでは藤吉、直ちに本丸へ攻め掛れ、もう一ト攻めぢやな』

『ハツ、只今總軍を以て攻めますれば、程なく落城は致しますが、敵も死物狂ひに戰ひませう。窮鼠却つて猫を嚙むの例もあり、味方の損失も多大と心得ます。殊に齋藤山城入道殿は、殿の御舅をいたされし御方、その一族なる城主龍興、これを討たんは、如何と、尙竹中との約もあり老幼婦女子と共に滅ずは、不仁の事と心得ます。何卒一應使者を遣し開城退散いたすやう申し聞せ度く、さすれば殿の御仁德は彌增すことゝ存じます。それにても萬一城内の者共、聞き入れず

ば只一戰に滅します。其時こそ誰に遠慮もなく、誰謗る者もござりませぬ。此儀御賢慮を願はしく存じまする』

『成程、尤もな事だ。よきに計らへ』

『ハツ、御聞屆け有難く、委細承知仕ります』

『秀吉のする事には無理がない。情味がある』と丹羽長秀が云つた。

こゝで木下は、淺野彌兵衛を使者として、城内本丸に遣しました。穩かに開城いたせば、城主龍興をはじめ、城中一同の者一切構ひなし、若し此上手向ひ致すに於ては、一人殘らず討取るべし、心得違ひなきやう返答あれ、といふ意味の口上を述べた。

これに答へた長井隼人が、後刻返答仕る、とあるので淺野は立歸りました。

扨て城内では俄かに評定となつた。いづれも、顏色靑ざめ、最早此上の防戰叶ひ難し、これは織田家の申越された通り、開城然るべくと、鬼神の如くに云はれた日根野兄弟まで、一言もなく評議は決して、長井隼人が秀吉の陣へ返答に及びました。秀吉も喜び、改めて信長より許したので、こゝに於て全く落城、織田の軍は一度にどつと勝鬨をあげました。

齋藤方では、兵部太夫龍興を始め一同は、金銀財寶を持ち、心細くも住みなれた、稻葉山城を開いて、思ひ〳〵に落ち行きました。

時は永祿七年七年十八日。

こゝで稻葉山は全く織田家の手に入つて、美濃一圓は平定なし、織田の領地となりました。

今度の戰ひに、木下の功最も大なりとあつて、御機嫌斜ならず、秀吉に美濃國の内、安八郡、多藝郡、石津郡の三郡を下され、洲股の城主は元の通り、尙瓢の合圖で大功を奏した記念として馬印を金の瓢とする事を許されました。秀吉の千成瓢箪の馬印はこれからであります。又弟小一郎は、城攻の時に一番乘りと其功を賞せられ、兄弟揃つて面目を立てました。

其處で、信長公は、淸洲から移つて、稻葉山城を改め、金華山岐阜城と名付けられました。

これで美濃攻の卷は終りとなりました。

これより秀吉は主君織田信長公が明智日向守光秀のために、本能寺に於て弑せられたるを備中高松城水攻めの最中にて承知し、天地容れざる大逆の罪に山崎合戰で誅伐を加へ、信長の後を襲ふて天下を掌握し、遂に朝鮮國はおろか大明國を震駭させた世界的の英雄、豐太閤秀吉の英名を馳せたのであります。

讀切講談 太閤記

昭和十六年十一月廿八日印刷
昭和十六年十二月五日發行

著者 田邊南龍（タナベ ナンリュウ）
東京市神田區神保町一ノ三〇

發行者 大谷德之助
東京市神田區猿樂町三ノ二三

印刷者 佐藤三次
東京市神田區猿樂町三ノ二三

印刷所 三美堂印刷所
東京市神田區神保町一ノ三〇

發行所 天佑書房
振替東京三三〇七番

（日本出版文化協會々員番號一一九〇五〇番）

定價 四拾五錢

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

41
502

天佑書房版の讀切武勇講談

約二百頁・定價各一册四十五錢・送料十錢

田邊南龍師口演	宮本武藏
田邊南鶴師口演	柳生旅日記
田邊大龍師口演	大久保彦左衛門
田邊南龍師口演	水戸黄門
田邊南鶴師口演	赤穗義士
邑井貞吉師口演	荒木又右衛門
田邊大龍師口演	寛永三馬術
田邊南龍師口演	太閤記
神田伯龍師口演	寛永御前試合
田邊南鶴師口演	堀部安兵衛

終